

武器なき戦争

長崎県 永木 盛雄

ラジオから軍艦マーチの勇ましい曲が流れ、その曲が終わると、大本営発表として真珠湾攻撃が発表され、太平洋戦争の火蓋が切って落されたことが報道されました。昭和十六（一九四一）年十月八日未明のことです。その戦果を告げるラジオ放送を聴きながら十四歳の私の胸は血湧き肉踊るの思いで思わず万歳と叫びました。小学校に通いながらも連日のすばらしい戦果に勉強も手に付かないぐらいでした。小学校の先生も大人も祖国防衛に一億一心、一丸となって日本を守らねばと

力説され、少年達も少年航空兵に、少年通信兵、予科練や少年義勇軍への協力を勧められました。私が昭和十七年一月、島原中学校で予科練の試験を受けました。残念ながら二次試験の身体検査で不合格となり、何か軍人に志願せねばと、二月に通信兵を志望して佐世保海兵団に受験に行きました。幸い合格し、後日、九月に入団の通知を頂きました。

私の家は菓子を製造・販売する店を父母が営業しておりました。私は男子四人兄弟の二番目で、昭和二年七月三十日、島原町桃山町にて生を享けました。島原町と安中村、杉岩村の三町村が合併して島原市が誕生したのは紀元二千六百年の昭和十五年四月一日でした。

私は昭和十七年三月二十日、島原市立第三尋常小学校の高等科二年生を卒業した後、九月一日に佐世保海兵団入団が決定していましたので、島原市立第一尋常高等小学校補習科に入学して一学期を学びました。八月の夏休みに島原中学校で徴兵検査が実施されました。その手伝いを市役所の軍事係より要望され、お手伝いをしました。この人達と同じように私も、九月から海軍に入団するのだと思いますと、心も浮き浮きする思いでいました。近所の海軍さん上りの人からは「海軍は訓練が厳しいぞ、覚悟しておけよ」と教えられました。

戦局は日本軍有利の情報が新聞やラジオで報道される毎日でした。一月にはマニラの占領、マレー半島への上陸、ビルマへ進入、二月に入ってシンガポールへ上陸、バレンパンに落下傘部隊降下、二月十五日、シンガポール陥落、南海の島々に上陸、戦火は拡大する一方で、正に連戦連勝で、ラジオから流れる放送は勇壮な音楽で、家の中も街中も戦争気分一杯で、海軍への入団が待ち切れない

ぐらいでした。父も母も戦勝気分に乗ってか私の海軍志願は何も云いませんでした。当時の社会情勢は、お国に召されることが男子の本懐、武門の誇りと称される時代でしたから、反対しようにも反対しきれない時代でしたから、父母も心では苦しんでいたであろうと思いました。

九月入団は「あつ」という間に来ました。家族や近所の方々に見送られて十五歳の少年は九月一日佐世保相浦第二海兵団に仮入団しました。島原市からも七人が同時に入団しました。入団して見て先輩から云われた厳しさが初めて分かりました。

十五歳の少年達ですから多少は考えての訓練と指導とは思いましたが、海軍魂を植え込むために叱られ叩かれての訓練でした。夜ハンモック内で両親の顔を思い浮かべ涙を流すこともありましたが、その度ごとに覚悟の上で志願したのではないかと、自からを慰め歯を食いしばりました。

二カ月間の基礎訓練を終えた私達は十一月一日、横須賀海軍通信学校に入学し、私は暗号に関する

教育を受けました。

暗号の緻密な教育訓練も非常に難しく苦勞しましたが、この暗号通信が日本の勝敗を左右する大切な通信だと一生懸命勉強しました。仲間の者に負けてはならないと。三カ月間、それこそ死物狂いで頑張りました。昭和十八年の新年を通信学校で迎え、一月三十一日海軍通信学校を卒業しました。

南方戦線は日本軍にとって厳しい状況となり、ガダルカナル島から撤退するのでは、とも聞きました。私達は原隊の佐世保海兵隊に復帰しましたが、二月一日付で台湾の新竹の海軍第十四練習航空隊に配属を命ぜられ、約百人が貨物船に乗船し佐世保港を出航しました。この頃までは敵潜水艦の攻撃も少なく、五日間で航空隊に到着しました。

この航空隊は広々とした飛行場と立派な兵舎がある大きな航空隊でした。古参兵に聞きますと兵員も五千人ぐらいの航空基地だと教えてくれました。「さあ、いよいよ戦闘部隊だ」と若い通信兵の胸

は高鳴りました。練習航空部隊ですから毎日練習機で飛行訓練が行われ、訓練を終えたパイロットは第一線に転属して行きました。

私達通信兵は地上勤務で、内外から送信される電波をキャッチし、暗号の解読送信に従事しました。この頃はまだ食糧事情は良く、困ることはありませんでした。四月十八日、山本連合艦隊司令長官が戦死されたとのニュースは後で知りました。五月にはアッツ島の玉砕や南方の島々での苦戦も伝えられているようでしたが、私達兵卒には詳しい情報は分かりません。

十一月三日突如米軍P38ロッキード戦闘機が数機、低空飛行で来襲しました。低空飛行のため電波にキャッチされず、機銃掃射を浴びた練習機が燃え始めて、「すわ空襲」と慌てて飛び出しました。全くの油断です。私は空襲と知り兵舎から飛行場の指揮所に走りました。大変な騒ぎになりました。指揮所の手前百メートルぐらいの所まで来た時、背後からダダダーピューンと機銃掃射を受

け、必死で近くの下水溝に身を伏せ、命拾いしましたが、機銃掃射の恐ろしさを身にしみて感じました。燃える飛行機、爆発する飛行機、それは大騒動となりました。まさか空襲を受けるとは予想もしてなかったため、防空壕一つ無く、逃げ惑う兵隊の姿は見るも憐れでした。それも一瞬の出来ごとでした。練習機は全滅状態となり、残るは格納庫中の数機となりました。この空襲により練習航空隊は解散となり、実戦部隊の狼戦闘機の基地となりました。

この基地変更により、私達五人(兵科種々)は第五百十三夜間戦闘機隊に配属を命ぜられました。この第五百十三戦闘機隊はニューギニア諸島の一部ソロモン島に所在します。同じくセレベス島に移動する者など百五十人位の中隊に編成され、高雄港を出港する五隻のタンカーに便乗し、二隻の海防艦に守られ冬のバシー海峡を南下しました。

米潜水艦の攻撃が激しくなる中で、大切なタンカーを一隻でも失ってはならないと海防艦が守つ

てはくれましたが不安な毎日でした。途中敵潜水艦の攻撃近しとの警報が出たためサイゴン港に一時泊避難しましたので、一週間かかってシンガポール港に入港しました。シンガポール港から貨物船に乗り換え、ジャワ島のジャカルタ港に到着し、ジャカルタ駅から軍用列車で、スラバヤまで三日掛かりました。

さすがに南方のジャワ島、日本では真冬の最中ですが暑く、その上薪を焚いて走る機関車はのろのろ運転でした。この頃南方戦線も連合軍の反撃が激しくなり、各島々でも激しい戦闘が続いている状況を耳にもしましたので、命令された基地までたどりつけるのかと不安になってきました。

スラバヤ港から小さな古い貨物船に乗船し、ボルネオ島のパリックバン港を経由して、セレベス島のマツカサル港に立ち寄り、ケンダリン港まで行くことになりました。この貨物船は第一次世界大戦の折、ドイツ軍から押収した船をさらに日本軍が押収した船であると聞かされました。

この船に百五十人の命を託して出発しましたが、いつ米軍の空襲を受けるか、潜水艦攻撃を受けるか、不安な日々でした。狭苦しい船室から抜け出して甲板から見る島々は椰子の木が林立した美しい風景でした。特に夜空は満天の星を散りばめたようで美しい、戦争中とは思えない夜空でした。星を眺めておりますと、両親の顔が臉に浮かびました。

昭和十八年の十月になって、数回にわたるボーゲンビル島沖の航空戦、ギルバート諸島沖の航空戦で貴重な航空機を数多く失った日本軍は制空権を奪われ、米空軍機の思うままになりつつあると聞いていましたので、いつ空爆を受けるか分からない航海でした。やっとケンダリ港に到着した私達は、トラックで飛行場まで送ってもらいましたが、悪路で揺れが激しく、道なき道を走りケンダリン飛行場に到着しました。飛行機らしい飛行機はなくガランとした空港でした。やっと到着しましたが休む暇もなく私人航空戦隊司令部のある

報に司令本部一同沈痛な空気が一色でした。後日サイパン島の戦死者は陸海軍四万三千人、在留邦人一万二千人であったと聞かされました。

中部太平洋一隊の島々が制圧されてからは、米軍は目標の一部をソロン飛行基地に向け、連日空爆が始まりました。その空爆の厳しいこと筆舌に尽くし難く、「グワー」と唸りを立て落ちて来る爆弾。我が方からは何門かの高射砲で応戦しますが、B 29 爆撃機は高度のため高射砲の弾丸は届かず、歯がゆい思いで防空壕に逃げ込む外に方法がありませんでした。

致命的だったのは滑走路に一トン爆弾を二十四発ぐらい落され、飛行場が復旧不可能になったことと、残り少ない航空機も被弾、爆発炎上してしまつたことでした。この空爆により司令本部の機能が遂行出来なくなり、後方に撤退することになりました。そして制空権を握られているので、スコールの激しい時機を選んで機密書類を急ぎ処分し、五時間後に波止場に集合せよとの命令がある

ニューギニア島ソロン飛行場勤務を命ぜられ、飛行機で着任しました。

ソロン飛行場は、西ニューギニアの北端に在つて、サイパン島やパラオ島の日本軍の援護に当たることが使命と聞きました。数少ない航空機は激化する島々の援護に飛び立って行きますが一機も帰還しません。ほとんどが打ち落とされたものと予想されます。いかに米空軍機が優勢であったかを物語っていました。四月二十二日はジャンブラに米軍上陸。五月十七日、モツフィン方面に米軍上陸。五月二十七日、ビアク島に米軍上陸。六月十五日サイパン島に米軍上陸、と次々に悲しい情報が入って来ます。

ニューギニアは気候風土が日本人には会わず、マラリヤ病、 Dengue 熱病に悩まされ、病人が続出し、私もマラリヤ病で苦しみました。制空権を米空軍に奪われ、食糧、弾薬、医薬品一切が補給されず、戦争よりも病気の毎日でした。

七月七日、サイパン島が終に玉砕との悲しい情報という慌ただしい撤退行動でした。基地には搭乗員と整備兵を残し、司令部要員と通信関係五十人ぐらいが波止場に待機していた大型飛行艇に乗り込みました。幸いスコールが激しかったので敵機に発見されることなく上空へ飛び立ちましたが、機内は寒くて震えながらも一時間半ぐらいでアンボン島のラハ飛行場に到着し、この地に仮の司令本部が設置されました。入つて来る情報は、米軍のグアム島への上陸、テニアン島への上陸と悲しい情報ばかりでした。こんな情報は内密で処理されました。私は二度目のセレベス島のケンダリン飛行場基地への配属を命ぜられ、今回も単独でケンダリン基地へ向かいました。どこの飛行場も飛べる航空機は撃破され、名前だけの飛行場でした。到着したのも束の間、またもフイリピンのミンダナオ島のダバオ飛行場に転勤を命ぜられ、再び私人の転属命令で、飛行機で移動しました。

ダバオ基地に来てホットしたのも束の間、通信

長から今度はセブ島のセブ飛行場基地に行つてくれと頼まれます。体調が不調な時でしたから「なんで私が行かねばならないのですか」と反発しますと、通信長からは「命令だ」と強い口調で云われました。命令か仕方がないとまた単独転属かと心細く思いました。当時、戦局がますます厳しくなり、七月七日サイパン島の玉砕、九月にペリリュー島、モロタイ島を占拠した米軍は、フィリピン諸島を直接攻撃の目標と定め進攻して来た模様で、各島各所で激しい戦闘が繰り返されていたとのでした。

十月二十日、アメリカ軍の海兵隊がレイテ島に上陸を開始し、日本軍の守備隊を攻撃しております。レイテ島を守るため、増援が計画されたとの情報もありましたが、レイテ海戦に失敗したため、制海制空権を失った日本軍の輸送船が途中で沈められ、レイテ島作戦は完全に敗北したと聞いておりましただけに無念でした。昭和十九年十一月十六日、薫空挺隊がレイテ島のドラック及びブラウ

動を監視し、軍艦や航空基地に連絡する。夜は夜で照明弾を打ち上げ昼のように明るくして日本軍の行動を監視する。日本軍の陣地の外にはアメリカ軍の軍用犬を放つて監視する。アメリカ軍の物の量の前にはどうすることも出来ず助けませんでした。

少ない食糧も食べなくては体力が持たないので、夜中に炊事場から貰って防空壕に持ち込みますが、四〇度ぐらいの高温多湿地帯ですので、折角の食物も腐っているのもあります。しかし腹が減っているのに食べないわけにはゆかず、腹の中に押し込んでしまいます。腐った物を食べるので下痢が始まる、正に悪戦苦闘の毎日でした。

十人に一丁の小銃、その小銃もアメリカ軍が残して行った拾い物で、鉄帽も五人に一人しか持たない。戦うにも戦う兵器を持たず、約二カ月間抵抗してきましたが、これ以上陣地を確保することは出来ない、島の北端に行けば軍艦が待っているとの情報を便りに、元氣のある者が五十人ぐらい、

エンに突入しています。セブ基地が特攻基地と云われるのもこのことだろうと思いました。

レイテ作戦に敗れたために、食糧の補給が出来なくなりしました。勤務外の非番兵は夜明前から山を開墾しトウモロコシを植え付けました。トウモロコシが実を付けなければいくらか食糧事情が好転するぞと、楽しみにしていました三月上旬、アメリカ軍の上陸が開始されました。上陸を援護するためアメリカ空軍の爆撃と、艦砲射撃が昼夜を問わず行われ、その物凄さは想像に絶するもので、まるで生地獄の様相でした。戦うにも武器のない私達は逃げ回るしか方法がなく、右往左往するばかりでした。防空壕に身を潜めていますと上陸したアメリカ軍は、日本軍の陣地近くにスピーカーを装置して、日本の童謡や民謡をポリウム一杯挙げて流し始めました。睡眠不足により戦闘意欲を低下させる手段で昼夜分けず、頭が変になるぐらいでした。

空には翼の大きい観測機を飛ばして日本軍の行

陣地から脱出して山の中に逃げ込みました。身体一つで逃げ出したので、早速食糧に困りました。

アメリカ軍の敗残兵討伐の目を逃れながら山中を逃げ回りました。栄養失調で動けない者は、気の毒ではありますが置き去りにせねばなりませんでした。中には一緒に行動出来ないと自害する者もあり、五十人ぐらいの戦友も最後には三人になってしまいました。

敗残兵の逃亡の隣れと、次々と倒れる戦友を看護することも出来ず逃げねばならぬ無情さ、戦争とはこんなに悲惨なものなのかと、怒りが込み上げて来ますが、どうすることも出来ず、ただ日本の勝利を願いつけて逃げ回りました。困りましたのは塩の確保でした。動物や草木を食べるにも塩が必要ですので、三日三晩海岸部落を下調べしました。その部落を早朝から急襲して、塩類を盗んで急ぎ山の中に逃げ込みました。塩が不足するとトウガラシを口の中に入れて辛抱しました。主な食糧はトウモロコシや豚、鶏、水牛等を盗んで来

ては焼いて食べました。

火が大切なのでボロ布を縄と一緒に織り込んで、火種を大切に保存して使用しました。迷惑を受けたのは原住民の人達です。日本軍敗残兵が食糧探しに山から降りて来て盗みに来るので油断が出来ない日々であったと思います。生きるための手段でした。被害を受けた原住民は直ちにアメリカ軍に通報し、アメリカ軍が捜索に来ますが発見出来ないまま帰ります。

原住民も半分に切ったドラム缶に塩水を入れて火を焚いて塩を作っていました。大切な塩を日本軍の敗残兵に食料品と一緒に奪われるのですから大被害に違いありません、悪いとは知りながら盗まねば死を待つばかり、このような生活をしながらも忘れ得ないのは祖国の安否でした。

五十人が次々と落伍していったあの状態、残った三人がいつまで元気でいられるのか不安いっぱいの中で、お互いに助け合い励まし合いました。生きよう死んでは駄目ぞと励まし合いました。あ

れほど上空を飛んでいた軍用機が飛行しなく無つ

たので、不思議なことだと思っておりましたら、空中から日本軍が無条件降伏したとのビラが三回散布されました。拾いましたが信用出来ませんでした。多分八月十五日か十六日ころと思います。

日本地図が印刷されスターリンと握手している印刷物のようでした。アメリカ軍の兵隊とフィリピン兵それに日本軍の捕虜と合同で、敗残兵の捜索が始まったようでした。

第一回目は、捕まったらどんな処分を受けるかわかりませんので、一目散に逃げました。カレンダーも無く何月何日か毎日が不明でしたし、栄養も充分でなく考える力もなくなっていましたので、捕まって善いのか悪いのかの判断も出来ないほど疲労しておりました。

第二回の捜索隊に捕まりました時、アメリカ兵が六人、日本人捕虜二人（説得役）、フィリピン兵が十人ぐらい、道案内の原住民が数人の編成の捜索隊でした。

私達三人の他に、よそで隠れていた人達十二人が一緒に米軍に拘束されました。捕まった時も全く無意識状態の中で、抵抗する力もなく捕まりましたが、「ほつ」としました。私達は下の部落まで連行され、コンクリート造りの四角な室に收容され、ちよつと心配しました。ほどなくしてトラックに乗せられました。トラックには武装した警備兵が五人乗車し出発しました。

途中山の中を警備兵は威嚇射撃をしながら下山しますので、不思議に思っておりましたところ、威嚇射撃の目的は、私達敗残兵を狙撃する者から守るためだと聞いて有難く思いました。收容所に連行され、九月下旬頃と思いますが武装解除されました。そしてもう逃げ回る心配もなくなった、原住民の家に食料品の盗みにも行かずにすむと「ほつ」としました。

しかし收容所の食事は粗末でした。小さなパン一切れと重湯のようなお粥一杯、ミルク一合ぐらいが一食分で、一日二回給与されます。これでは

栄養不足になり栄養失調者が続出しました。質、量共少なく粗末な食事でした。痩せ衰えてお尻の肉はわずかで骨ばかり、肉がないので肛門は開いたまま、排出物はだらだらと流れ出て臭いこと、大変な生活でした。

私のように十八歳の若い者は耐え得ましたが三十代の人々には苦しい日々だったと思います。收容所内でも死亡者が出ました。十月末でした、私達はレイテ島の收容所に移送されました。セブ島に別れを告げてレイテ島へ。レイテ收容所では食事は少し良くなり、いくらか楽になりました。

セブ島の守備兵は陸海軍合計二万人ぐらいと云われ、捕虜になったのは六千人ぐらいと聞きました。半数以上の方がどうなったのでしょうか。十二月中旬、レイテ島より日本への帰還船に百五十人が乗船することになりました。フィリピンでの六カ月余り、武器らしい武器も無く、優勢なアメリカ軍の優秀な兵器に向かつて、精神面での闘い、何と無謀な戦争であつたらうか。兵器無く食糧無

く医薬品無く多くの優秀な人々が戦死されました。戦闘での死者だけではなく、食糧がなく餓死された人々の無念さはいかばかりでありましたでしょうか。察するに余りあるものがあります。この無念さは比島ばかりではありません。ニューギニアでも餓死者続出、南方の島々でも同じような戦病死者が多く出たであろうことは想像出来ず。

比島決戦に増援された満州や中国からの優秀な勇士達が上陸も出来ず、海の藻屑となられた無念さは察するに余りあるものがあります。せめて上陸し一発でも発砲して頂きたかった。日本の勝利を信じ十五歳で海軍を志願し、台湾の新竹飛行場で受けた米軍の空爆を始め、シンガポール港入港前に敵潜水艦「現る」の報でサイゴン港に避難、シンガポールからジャカルタ、ジャワ島のスラバヤ、ボルネオ島のバリワクバン、セレベス島のマカツサル、ケンダリン空軍基地、アンボン島のラハ空軍基地、ニューギニア島のソロン空軍基地、ミンダナオ島のダバオ空軍基地、そしてセブ島の

懐かしく感じました。工作学校に二泊して復員列車で帰路につきましたが、東北方面に行く列車に乗っていることに気付き、上野駅で下車し東京駅から九州行きの列車に乗車し、広島で復員列車に追いつき、窓から引っぱり上げて貰い、島原にやっと帰りました。

昭和二十年十二月二十八日、十八歳五カ月の年齢で我が家に飛び込みました。音信不通の私が無事で帰って来た姿を見た両親は涙を流し喜んで迎えてくれました。仏壇の前に座り、無事帰れましたことに、お礼を申し上げました。

終戦後六十年経りました今日なお、当時の状況を思い浮かべ、自分が生きて復員出来たことを不思議に思うと同時に、多くの人々の悲惨な最後を思い出し、安らかにご成仏下さいと祈らずにはいられない気持でいっぱいです。

ご参考にフィリピン並びにニューギニアの戦死者の数を列記し、いかに尊い人命が失われたかとお知り下さい。この数字は政府発表の数字です。

セブ空軍基地と転属転属で、単独で移動しました。どこもわずか数機の航空機しか無く、優勢な米軍の航空機に対戦し壮烈な最後を遂げた先輩の勇士、大人と子供の喧嘩同様でした。

戦死、戦病死した先輩の皆様方、戦争は終わりました安らかに眠り下さいと、手を合わせながら米軍の上陸用舟艇に乗船させられ、レイテ島を後にしました。

冬の海は荒れてほとんどの兵隊が船酔いに苦しみました。日本に帰れる喜びを胸に抱き、十日ぐらい荒波にもみくちゃにされ浦賀港に到着しました。日本が見えた、見えたぞ、一同は子供のよう喜びました。三年三カ月振りに日本本土の土を踏むことが出来た喜び、この喜びを餓死された人達にも味わって貰いたかったと思わず涙が出ました。私達は、旧横須賀海軍工作学校に収容され、復員の手続きを終了しました。

この工作学校は、三カ月間通信訓練を受けた海軍通信学校の道路を隔てた向う側にあるだけに、

フィリピン方面の陸海軍部隊の総兵力六十三万人、戦死者は一般邦人を含め五十二万人、今次対戦中最大の戦死者です。

ニューギニア方面の島々を加えて、戦死者約四万九千人と云われ、約半数が栄養失調で戦病死した人達と想像されます。武器無き闘い、食糧無き戦い、医薬品無き戦い、二度と戦争の悲劇を繰り返すなど大声で訴えます。